

難波にはじめてくだりしは、やよひのついたち頃なりしに、あはれなる打聞こそ有りしか、難波新地といふ所に、よなく、辻かげにたちて、往來の人になさけをあきなふものどもつどふ中に、むつき、きさらぎのほどにや有りけん、ひとりの女のみめかたちきよげなるが、いづくより來るとする人もなくて、おなじさまに立ちまじりて、さるわざしけるを、いくりの中の眞玉ひろひ出でたるやうに、うかれ人たち此女をいどみあひける、十夜ばかりはさて有りしが、物のはしに歌をかきつけおきて、又の夜よりたえて見えざりけり、その歌

あだし世に露のうき身のながらへて草のむしろにぬれぬ夜ぞなき、いかなる人の身をはふらして、かゝるはしたなるさまにはなりはてしならんと、此頃のことぐさには、みな人いひあへりけり、

〔當世武野俗談〕夜發一と勢

夜發を夜鷹とて、江戸にて稱する有街賣女色と法花經の普門品に説れたるは總嫁の類なるべし、凡、鮫ヶ橋本所淺草堂前、此三ヶ所より出て色を賣、此徒凡人別四千に及ぶと云、其道の物語りなり、其中に本所より出る夜發の中に、一際勝れて器量よろしくおまゆんと云、女有、毎夜柳原土手のはづれ、筋違橋の際、髮結床の裏へ出て、能人此女を知る處なり、さればおかしき咄有、去年の暮大晦日の夜、其客の數てうど三百六十餘人有りしとなり、されば、三百六十日は、一年の日數なり、又大としの夜は、一とせのおはりなり、はやるとて其親方一とせのおしゆんと名乗らせけり、今専らはやる女なり、

〔都の手ぶり〕よたか

沖つ舟よるべきだめぬを、うかれめとよび、家にありてまらうどをまつをば、くゞつとぞよびつけたる、これはさるたぐひには、さまかはりて、家にしもあらず、舟にしもをらず、たゞ大路のくま